

かけら人生

リサイクリング運動の陰に



山村 硝子

かけら人生

——リサイクリング運動の陰

かけら人生

——リサイクリング運動の陰に——

昭和五十四年八月十日 初版発行
昭和五十五年四月十日 二版発行

発行者 黒 川 洸

編集 日経事業出版社
制作

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一ノ九ノ五
電話(〇三)二七〇一〇二五一

印刷 東光整版印刷
製本 トキワ製本所

表紙デザイン
元 永 定 正
カ ッ ト
江 口 和 子

はじめに

これは、かけらに賭けた男の物語である。六年前、彼は武蔵野を一人でかけめぐり、あきびん回収のための風変りなシステムをつくりあげた。ところが、これがのちに『びんをびんの資源に』の合言葉で、全国展開することになった山村硝子ボトル・リサイクリングの幕あけであった（かけらとは、あきびんを砕いたくずガラスのこと。びんの原料として再生される）。

この物語には、彼をほげしく行動にかりたてた執念についての描写がある。それが、しばしば社内に向けられていることを読者は、あるいは奇異に感じられるかも知れない。しかし、私はこれをもって、彼の人柄や社の空気がとくに変わったものだとは考えていない。大きなチャレンジが遂行されている時、このような感情が流れるのは、むしろ、ありがちなことである。

さきごろ、私はリサイクリングについての主張をまとめて出版した（一本のあきびんから——リサイクリング事始・日本経済新聞社刊）。これは、その『実践編』である。併せお読み下されば

幸いである。

この物語は、日本経済新聞社の田中忠治氏の健筆に成った。いきいきとした読物になったことをよろこんでいる。

昭和五十四年八月

山村硝子株式会社

社長 山村徳太郎

山村硝子株式会社

(1980年5月現在)

創 業 1914年

資 本 金 21.45億円

売 上 高 450億円/年

生 産 量 54万トン/年 (16億本/年)

従業員数 1,700名

本 社 兵庫県西宮市東浜町 2 番113号 〒662
電話 0798-34-1301

西宮工場 兵庫県西宮市東浜町 2 番113号 〒662
電話 0798-34-1301

東京工場 神奈川県相模原市大山町 3 番45号 〒229
電話 0427-71-5111

群馬工場 群馬県館林市下早川田343番地の1 〒374
電話 02767-4-0201

播磨工場 兵庫県加古郡播磨町新島 5 番 〒673-01
電話 0794-37-1251

目次

西宮の春

1

窓際族の転機

7

「黒びんとの格闘」

16

近藤さんとの出会い

23

技術を学ぶ

30

酒販組合方式の夜明け

34

関東に広がる

45

リサイクリング委員会

51

関西にも拠点が

61

技術の進歩

71

カレット部隊発進

77

新天地目ざして

82

二人目のえびさん

89

西宮の春

西宮市の初春は、「えびずさん」と「新酒」から始まる。

昭和四十年に、浜甲子園、香櫨園などの有名な海水浴場が閉鎖され、むかしからの白砂青松こそ姿を消したが、灘五郷の酒蔵は健在である。初春には、大阪国税局が「級別審査会」を開いて、新酒の品定めをするのが恒例となっており、その評価をめぐって蔵元は緊張する。五十四年の新酒は「まろやかで辛口。需要もふえそう」とのお墨付きで、とりわけ活気づいたようにみえる。

大阪と神戸のちょうど中間。大阪湾に面して気候も温暖、六甲の山沿いまで高級住宅がいらかを連ね、関西学院、神戸女学院などの教育機関を擁して、いち早く文教都市宣言をしているが、海岸沿いは「灘の生一本」を中心に、ビール、ハムなどの食品工場や鉄工、化学などの工場が建ち並ぶ。春、夏の二回、全国の目を引きつける高校野球のメッカ、甲子園球場も西宮市にある。その球場から目と鼻の先、東浜町。酒蔵に囲まれるようにして清酒びんをはじめ、あ

らゆるびんの供給元、山村硝子株式会社の本社と西宮工場がある。

昭和五十四年一月八日―。

清酒用のびんを積んだトラックの列。

本社の応接室では見学にやってきた奈良県的生活学校関係者が、びん工程の説明に聞き入っている。

「清酒びんやウイスキーのボトル、調味料のびんと、びんの種類はさまざまですが、年間ざつと二百二十万トンが生産、出荷されています。このうち二一％が山村硝子の製品となっています。西宮工場と東京工場（神奈川県相模原市）を主力に、一日の生産能力は千三百トン、牛乳びんに換算して約五百三十万本が作り出されます。そして私どもは、この原料の一部にみなさんが使い捨てされたあきびんを利用する、リサイクルングを進めているのです。その方法をこれから詳しくご説明しましょう。みなさんも、この運動に加わって戴けると有難いと思います。そのあとで工場へご案内します。びんのかけらが新しいびんに生まれ変わっていく様子がご納得戴けると存じます」

本社の役員会議室で。役員でリサイクリング委員の松本巖がまとめた「十年後のリサイクリング」をめぐって役員会がたけなわ。メリハリのきいた声で、松本はたんたん十年後のガラスびん業界とリサイクリングを見通し、その問題点をまとめていく。

「ご承知のように欧米に比べて、日本のびんの使用量はきわめて少ない。日本の一人あたり年間消費十七キログラムは、フランス人の五十キロ、アメリカの五十五キロは別としても、ベルギーの三十五キロにも、とても及ばない。十年後にこれらの国並みの消費に拡大されるとみて試算しますと、昭和六十四年には六百万トンを作らないと、追いつかないことになる。現在のほぼ三倍ですね。だが、これはあまりに楽観的で、実情には合わない。では、消費の拡大が人口の伸び率と同じと仮定すると、どうなるか。この場合には十年後にやっと二百三十万トンでしかありません。それもびんがプラスチック容器や紙パックにとってかわられないという条件です。したがってびんの需要を伸ばすには、びんが容器の中では一番清潔で、プラスチックや紙のように捨てずに再生できるという利点を一段と消費者に認めてもらう努力がどうしても必要ということになります。そのうえで、初めて需要見通しが立ちます。その点、わが社の軽量化びんは強い武器となるでしょう。またリサイクリングの拡大が原材料の節約、国家的な

資源・エネルギーの節約につながることを市民の方にぜひ知ってもらう必要があります」

大阪証券取引所で。

副社長の山村武が記者会見し、増資を発表。

山村硝子は東証、大証の一部上場会社であり、社業について取引所で会見、発表することになっっている。

「払い込み三月十五日で、三百七十二万株を公募します。増資額は一億八千六百万円。これで当社の資本金は十九億五千万円になります。時価発行ですから、資金の調達額は約十四億円。兵庫県加古郡播磨町に約五万平方メートルの用地を買い、軽量強化びんの専用工場を作る予定です。資金の大半はこの土地代にあてます。軽量強化びんというのは、軽くしたのに強くなつたびん」で、リサイクリングにも適した商品開発という意識から生まれたものです。強くて軽いーということで、種々の利点がありますが、特にあきびんを破砕して、回収するときも、輸送コストがかなり軽減できるわけです。五十三年十二月中間決算は集計中ですが、売り上げは前年同期に比べ八%増の百八十九億になります」

再び、本社リサイクリング・グループ室で。

総括リーダー戎谷（えびすだに）重善を囲んで、グループの新年第一目標の討議が白熱化している。

戎谷 新年の第一目標地区は堺市に決まったわけだな。

山下光茂（西部地区担当マネージャー）　そうです。堺市の酒販店は四百八十店です。ここにドラムかんを置き、あきびん集めをやりたいと思います。酒販組合は、四十店から五十店ごとに部会をもっていますので、一人が二部会ずつ担当、交渉に入りたいと考えます。組合にはきよう話します。新年会で幹部の人たちが集まっていますので。組合員におろしてくれると思いますが、組合がまとめてから話し合うより、われわれが一店ごとにひざ付き合わせた方が、軌道に乗りやすいでしょうから。

戎谷 今度のキャップは山下實君に決めるがいいな。

山下實 名簿と地図を作ります。第一回のあきびん集めのトラック手配は一月二十五日からとします。十七日間しかないのです、精力的に酒店に話さないと、トラックが空回りすることになります。これまでのように、このプロジェクトに限って、戎谷さんも山下マネージャーも私

の指示に従ってくれるわけですね。

戎谷 その通りだ。消費者の方と、酒店の方と、われわれが腹を割って話すことが一番大切なんだ。一対一の付き合いを強めるためには足で歩くことが絶対だ。総括リーダーもマネージャーもデスクにいてはだめだ。グループの一員としてひざ詰めで話さなければ、わかってもらえないぞ。だから一地域を開拓するときは、一人がキャップになって、それ以外の者はその指示に従うというやり方は変えない。

山下實 とにかく酒販店とドラムかん設置について話し合う。酒店に戻ってきた使い捨てのびんを、ドラムかんに入れてもらう。これが順調に集まるようになったら、自治体と話し合いを持つ―堺市はこの方式でスケジュールを組みます。

戎谷 それでよいだろう。これでわれわれがあきびんを回収する拠点は一万個所を越えた。五十三年に集められたと推定される使い捨てのびんは全国で約十二万トン。そのうち山村で十万トン以上を集めた。社長は「山村で二十五万トン」という目標を示されているが、これでは不足だ。二十五万トンは三年ぐらいで突破、三十五万トン回収までいけるよう努力しよう。ではすぐに酒屋さんへ出向いてくれ。

指示を終えた戎谷は、自分もグループの一員と同じように、あきびん回収先との交渉に出かけた。本社を出て阪神電車まで歩きながら、東京、西宮合わせて十二人の回収チーム、三十人のカレット（くずガラス）処理チームの長、総括リーダーは数年前からの苦闘を振り返って、つぶやくのだった。

「何とかリサイクリング運動の第一歩はできた。でもこれでよかったと思うほど、オレは生やさしい男ではないぞ。雨の日に長くつを泥だらけにして、相模平野をただ一人歩いた、あの厳しかった日々を忘れないためにも、日本全国からあきびんをすべて集めるまでオレは万歳しないぞ」

窓際族の転機

1

「関西学院大を卒業して、山村硝子に入社したのが昭和三十七年。機工部や業務課を経て四十一年に相模原市の東京工場に転任しました。四十四年には係長から課長に昇進、山村硝子の持

家制度の適用を受けて相模原市内に敷地百七十五平方メートルのわが家もでき、まずは順風満帆の毎日でした」

新しいびんの包装、運搬、保管の仕事を一手に引き受け、協力会社を加えると二百人にも及ぶ従業員が物流の仕事に従事するという、忙しい職場で、コマねずみのように働いた——と戎谷は回想する。他の事は考える暇もなく、余裕もなかった時代だった。

四十六年、戎谷は東京工場から転任の辞令を受け取った。

「東京支店商品開発部勤務を命ず」。

自宅からバスで十五分の工場勤務が、東京・新宿までの通勤に変わった。通勤時間が長くなることぐらい、サラリーマンにとって何でもないが、一時間余もかけて出勤する新課長に何の仕事もない——ということは、それまでが忙しかっただけにこたえた。

仕事がないわけではないのだが、業務畑と違って、商品開発はエンジニアが中心。一人一人が主任研究員といった形で、事務屋の戎谷がすぐにできることといったら、雑用だけ。研究が主体なので、課長といってもハンコを押すことも少ない。

部長、次長が次々と開発を示唆していく。